

## テサロニケ人への手紙第一 3章 「引き離された使徒とテサロニケ人」

### 1A 気がかり 1-5

1B 福音の同労者 1-2

2B 定められた苦難 3-4

3B 誘惑する者 5

### 2A 生きがい 6-10

1B 慰め 6-7

2B 堅忍 8

3B 信仰の不足の補い 9-10

### 3A 祈り 11-13

1B 開かれる道 11

2B あふれる愛 12

3B 聖潔 13

## 本文

テサロニケ人への手紙第一 3章を見ていきたいと思います。3章は、パウロがいわば、自分の小さな子が事故か事件によって引き裂かれたような思いになっていることが分かります。彼は、彼らに対して、自分の子を養い育てる母親のようだ、また、父親のようだと言っていました。神の福音だけでなく、自分自身のいのちまで、喜んで与えたいと願いました。それほど、愛する者たちになっていて、さあこれから彼らが主にあって成長するのを助けよう、建て上げていこうと思っていた時に、騒動が起こり、やむを得ず、テサロニケを出て行かなければいけなくなりました。パウロたちを家に迎え入れていたヤソンが捕らえられたので、パウロたちが町から出て行けば、保釈金だけで釈放されることが分かったからです。

成長半ばで、引き裂かれた親たちの思いはいかばかりのものでしょうか？2章17節でパウロは、「しばらくの間あなたがたから引き離されていました。」と言っていますが、この「引き離される」は、「孤児にさせられる」というのが、元々の意味です。離れ離れにされてしまった、その辛い気持ちを言い表しています。しかし、肉の親と同じようにパウロは、あきらめません。行方不明になった子を、だれもが忘れても、それでも探し続けるのが親です。それと同じように、パウロたちはそのままにしておきませんでした。そのことを書いているのが3章です。捜しに捜して、奇跡的に子供が見つかったのと同じように、パウロは、テサロニケの人たちに信仰と愛があることを知って、深い安堵を得るのです。それでようやく、続けて彼らを主にあって建て上げて行くことができると知り、なおのこと熱心に祈ります。

## 1A 気がかり 1-5

ところでパウロたちにとって、彼らは、生きがいそのものでした。2章の最後の節で、「主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となる」と言っています。主のみこころは、福音のことばによって、人々がご自分に対して実を結ぶことです。信仰と愛の実を結ぶことです。テサロニケ人たちは、まさにその実であります。これこそが、どんなに労苦がともなっても、彼らのことを思うと、とてつもなく慰められる理由です。それで、テモテを送ることにしたと3章1節で言っています。

## 1B 福音の同労者 1-2

<sup>1</sup> そこで、私たちはもはや耐えきれなくなり、私たちだけがアテネに残ることにして、<sup>2a</sup> 私たちの兄弟であり、キリストの福音を伝える神の同労者であるテモテを遣わしたのです。

ここの「耐えきれなくなる」という言葉は、元々は、「覆っているものが外れる」「屋根が外れる」というような意味合いのあるギリシア語です。強風が吹いて、ついに耐久していた屋根がはがれた、というイメージです。パウロは、心の深いところから出る思いを言い表しています。ずっと、自分自身が行こうと思っていたのに、サタンが妨げました。どんなことをしても、サタンが自分を行かせないようにしていると、彼は肌で感じ取っていました。それで、じっと我慢していたのでしょう。パウロが先にベレアからアテネに行き、それからシラスとテモテがやってきました。二人はやってきたのですが、パウロは初めにテモテを、後でシラスもマケドニアに行きます。そして、パウロがアテネからコリントに移動します。そこで働きを始めた時に、テモテとシラスが戻ってきました(使徒 18:5)。

テモテを自分の働きに入れられないのは、大きな損失です。彼のことを、「私たちの兄弟であり、キリストの福音を伝える神の同労者」と言っています。兄弟とは関係のことを表しています。同労者は働きのことです。兄弟とは、同じ父を持つというようなつながりです。そのように、いつもいてほしいつながりを持っているテモテが離れることとなります。かなりの犠牲ですが、それだけ犠牲にしてもテサロニケの人たちのことを知りたかったのです。そして、同労者とは、共に労し仕えている人のことですが、「執事」とも訳される言葉です。しもべの姿勢を取っている人です。どんな時にも、だれもいなくても、手を汚し、仕える人です。そういった仲間がいないのは、大きな損失です。しかし、テサロニケの人たちのことをもうと、至ってもいられなくなっていたのです。

## 2B 定められた苦難 3-4

<sup>2b</sup> あなたがたを信仰において強め励まし、<sup>3a</sup> このような苦難の中にあっても、だれも動揺することがないようにするためでした。

テモテを遣わした目的は、「信仰において強め励まし」することとあります。強めるという意味は、「土台を作る」とか、地面を固めるというような意味合いがあります。信じた後に、しっかりとその信仰

が堅い岩のところに建てられていないといけません。「ルカ 6:48 その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せても、しっかり建てられていたので、びくともしませんでした。」地面を深く掘り下げて、岩に到達するまで掘らないといけません。それから、岩の上に土台を据えるのです。表向きは、砂の上に建てても、岩の上に建てても同じように見えますが、洪水が来た時にその違いは一目瞭然となります。こうやって、信仰を強めることが必要です。

そして、「励ます」ことが必要です。どのようにして、信仰が深く掘り下げられていくのか？励ますのです。励ますは、「そばに呼ばれる」という意味合いがあります。そばにいて、助けることです。ゆえに、私たちの信仰は、集まらずして強められることはありません。「ヘブル 10:25 ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合ひましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。」そして、このようなことを通して、苦難の中にあっても、動揺する、揺れ動くことがないのです。びくともしないのです。

<sup>3b</sup> あなたがた自身が知っているとおりに、私たちはこのような苦難にあうように定められているのです。<sup>4</sup> あなたがたのところにいたとき、私たちは前もって、苦難にあうようになっておいたのですが、あなたがたが知っているとおりに、それは事実となりました。

苦難について、知らなければいけない二つの大事なことがあります。一つは、定められていることです。私たちは、キリスト者になるということが幸せになる道であることを知っています。確かにその通りです。けれども、その「幸い」が何なのか？は吟味してください。主が、八つの幸いを説かれました。心の貧しい者は幸いである、から始まります。そして最後は、何ですか？「マタ 5:10 義のために迫害されている者は幸いです。」であります。キリスト者に召されているということは、世に憎まれるようになると、主から教えられています。主に従うことを、まっすぐに行って行こうとするならば、必ず、この世が住みづらくなります。この世においては、大切なものがたくさんあります。家族のことがあるでしょう、仕事のことがあるでしょう。自分の追求しているそれぞれの目標があるでしょう。主を第一にする時に、必ずなんらかの形で犠牲が伴うのだということを知ってください。

もう一つは、主は、前もって予め、苦しみにあうことを教えておられるということです。苦しみに対して用意をするということです。これはどういうことかといいますと、私たちは苦しみを受けると、用意ができていないと、その苦しみは何か神が自分に対して怒っているのかもしれないとか、あなたは、キリスト者としてふさわしくないとか、偽りの声が聞こえるからです。それが、次に出てきますがサタン誘惑です。キリストが苦しまれたように、みこころを求めて生きて行くならば、苦しみがともなうものなのです。ところが、いつの間にか、キリストに従えば、問題がないのだという、誤った考えを受け入れているようになります。

ユダヤ人たちは、イエス様がエルサレムに行かれる時に、そこでローマを倒して、神の国を建ててくださるのだと信じていました。けれども、自分の十字架を負わなければ、わたしに従うことはできないとイエス様は言われました。そして、主は、聖書に書かれているように、苦しみを受けてから栄光に入られたのです。しかし、その用意ができていなかったのも、ユダヤ人たちはイエスを十字架につけ、弟子たちは見捨て、ペテロは主を否んだのです。つまり、苦しみを受けることになるのだということ前もって知っていて、それを心得ている時に、苦しみが事実、来た時に、それが主のみこころであることを受けとめることができるのです。

### 3B 誘惑する者 5

<sup>5</sup> そういうわけで、私もはや耐えられなくなって、あなたがたの信仰の様子を知るために、テモテを遣わしたのです。それは、誘惑する者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦が無駄にならないようにするためでした。

テサロニケ人たちが、今、話したようなかたちで、サタンの誘惑を受けて、それで信仰から離れてしまうのではないかと、とても心配していました。サタンは、いろいろな形でみなさんの信仰を揺るがすため、ありとあらゆる手を尽くします。高ぶり、罪の責め、目の欲や、肉の欲などいろいろです。しかし、ここでは苦しみの時にサタンがそそのかすことですが、それは神があなたに敵対しているという、サタンの欺きが最たるものです。

パウロは、苦しみに対しての教えを、ロマ書 8 章の後半部分で、じっくりと取り組んでいます。「31 では、これらのことについて、どのように言えるでしょうか。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」神は、苦しみの中で敵対していることは絶対にありません。見方しておられます。サタンは、その逆をあなたにささやきます。しっかり、サタンに立ち向かってください。「32 私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか。」苦しむ時、往々にして貧しくなります。事欠くことがあります。しかし、主は必ず恵んでくださいます。「33 だれが、神に選ばれた者たちを訴えるのですか。神が義と認めてくださるのです。」サタンは訴えるのです。しかし、神があなたを選び、義と認めておられるのです。「34 だれが、私たちが罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしてくださるのです。」罪ありとするのは、サタンの常套手段ですね。しかし、イエス様が執り成しておられますから安心です。

「35 だれが、私たちがキリストの愛から引き離すのですか。苦難ですか、苦悩ですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。36 こう書かれています。「あなたのために、私たちは休みなく殺され、屠られる羊と見なされています。」37 しかし、これらすべてにおいても、私たちが愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。」サタンは、キリストの愛か

ら何とかして、私たちを引き離そうとします。しかし、これらの中にあっても、圧倒的な勝利者なのです。パウロは、このことをテサロニケ人たちに十分に教えられていませんでした。だから、とても彼らのことを案じたのです。耐えられなくなり、テモテを遣わしました。

## 2A 生きがい 6-10

### 1B 慰め 6-7

<sup>6</sup>ところが今、テモテがあなたがたのところから私たちのもとに帰って来て、あなたがたの信仰と愛について良い知らせを伝えてくれました。また、あなたがたが私たちのことを、いつも好意をもって思い起こし、私たちがあなたがたに会いたいと思っているように、あなたがたも私たちに会いたがっていることを知らせてくれました。

パウロは、福音と訳しても良いギリシア語を使っています。彼らの信仰と愛について聞いたことが、良い知らせでした。「1:3 私たちの父である神の御前に、あなたがたの信仰から出た働きと、愛から生まれた労苦、私たちの主イエス・キリストに対する望みに支えられた忍耐を、絶えず思い起こしているからです。」信じたばかりなのに、信仰から出た働きがすでにありました。愛には労苦がともなっていました。それを聞いたのです。

そして、「いつも好意をもって思い起こし」ていました。パウロたちが突然去って行った、ということは思い起こしておらず、彼らが神のことばを伝え、主にある模範を示してくれていたことを思い起こしていたのです。

さらに、テサロニケ人は、わずかな期間しかパウロたちがいなかったのに会いたがっていたのです！私たちは、福音の働きにおいて相互の結びつきが生まれます。互いに会いたいと願うものです。私のロゴス・ミニストリーの働きで、自分が会いたいと願って、招いてくださり、相手も会いたがっていたことがあります。その反対に、ずっと福音の恵みにあって会いたいと願っているのに、相手が何か違うものを求めて、その心が冷めることもあります。パウロは、ガラテヤ人が彼のことを自分の目を抉り出したいと思うほど、愛し慕っていたのに、律法主義的になって心が冷たくなりました。しかし、テサロニケの人たちには信仰と愛が生きていて、それでパウロたちにも会いたがっていたのです。

<sup>7</sup>こういうわけで、兄弟たち。私たちはあらゆる苦悩と苦難のうちにありながら、あなたがたのことで慰めを受けました。あなたがたの信仰による慰めです。

パウロが、どれほど慰めを受けていたかは、使徒の働きの中でうかがい知ります。彼は、独りでアテネからコリントに行きました。その時は、「1コリ 2:3 あなたがたのところに行ったときの私は、弱く、恐れおののいていました。」パウロ自身が迫害を受けていて、テサロニケの人たちのことが、

気が気でならなくて、弱く、恐れおののいていたのです。その中で福音を宣べ伝えていました。「使 18:5 シラスとテモテがマケドニアから下って来ると、パウロはみことばを語ることに専念し、イエスがキリストであることをユダヤ人たちに証した。」みことばを語ることに専念しています。

このように、どんなに苦悩と苦難があっても、それでもかまわないと思うほど、生きがいに感じるのは、その働きによって人々が信じ、また信じるだけでなく信仰に留まっていることです。

## 2B 堅忍 8

<sup>8</sup>あなたがたが主にあって堅く立っているなら、今、私たちの心は生き返るからです。

午前礼拝で、ここの箇所をじっくりと見てきました。テサロニケ人の人たちは、ただ主にあるだけでなく、主にあって堅く立っていました。なぜなら、反対が多いからです。困難が多いからです。その中で、心が揺らいでしまいます。しかし、そうであってもしっかりと、主にあって堅く立っていました。これはちょうど、敵がどんどん自分たちに攻めてくるような時に、背を向けて逃亡するのではなく、立ち向かい、後退しないことです。みなさんの信仰の歩みで、後退してしまっていると感じる時がありますか？心が疲れて、過去の犯していた罪を犯してしまう。失望して、主に仕えることが、心から進んでではなく、形だけのものになってしまう。困難の中にいると、私たちの心は弱り、サタンからあらゆる攻撃を受けるので、揺らいでしまうのです。しかし、それでもしっかりと立ちます。

そうしていさえすれば、自分たちの心は生き返るとパウロは言っています。主にあって堅く立っていさえすれば、主が戦ってくださるからです。ヨシャファテのことを思い出してください。大勢の敵が迫って来ていた時に、次の預言がありました。「Ⅱ歴代 20:17 この戦いは、あなたがたが戦うのではない。堅く立って、あなたがたとともにおられる【主】の救いを見よ。ユダとエルサレムよ、恐れてはならない。おののいてはならない。明日、彼らに向かって出陣せよ。【主】はあなたがたとともにおられる。」多くの人は、自分で戦おうとしていろんなことをします。それは空振りします、空回りします。しかし、すべてのことにおいてこの方を主とするのです。第一とするのです。そこに堅くなっていると、主ご自身が他のすべてのことをしてくさるのです。このことを、ぜひ味わってください。まず、主がともにおられ、主が戦ってくださることを知るならば、もっと主に信頼しやすくなります。

## 3B 信仰の不足の補い 9-10

<sup>9</sup>あなたがたのことで、どれほどの感謝を神におさげできるでしょうか。神の御前であなたがたのことを喜んで、そのすべての喜びのゆえに。

パウロたちは、彼らの信仰のことであまりにも喜んでいたので、ただただ主の前で感謝するばかりでした。

<sup>10</sup> 私たちは、あなたがたの顔を見て、あなたがたの信仰で不足しているものを補うことができるようにと、夜昼、熱心に祈っています。

ここから、パウロたちの熱心な祈りになっています。彼らが主に堅く立っていることは、とてつもなく喜ばしいことなのですが、もっともっと教えたいことがあったのに、突如として引き離されてしまったので、教え切れていないことがありました。それを「信仰で不足しているもの」と呼んでいます。4章で、パウロは、そのいくつかをかいつまんで話しています。主が再び来られないうちに、死んでしまった信者たちのことで彼らは悲しんでいました。また性道徳について、異教徒に影響から抜け切れていませんでした。それから、仕事をせずにくらついている者たちもいました。そういった事柄についても、パウロは教えていきたいと願っていますが、手紙だけではなく、顔を見て、それでその不足を補いたいと思っていました。それを、夜昼も熱心に祈っていたということですから、相当の熱の入った祈り会だったことでしょう。

パウロの働きには、神のご計画を余すところなく伝えるという使命がありました。エペソの長老たちには、そのことを完徹したことを伝える言葉があります。「使 20:27 私は神のご計画のすべてを、余すところなくあなたがたに知らせたからです。」ご計画のすべてを教えたので、もう、主にお任せしようということを彼は話しています。けれども、テサロニケ人たちはそこにまで至っていなかったのです。私たちも、しっかりと神のご計画の全体を知る必要がありますね。まだ、そのことを知る前に、教会から離れてしまう人たちが多くいます。そこで、信仰が正しい信仰ではなく、独りよがりになっていることが多くあります。

この「補う」のことばは、「調整をする」「整える」「終わらせる」というような意味合いがあります。それは、建築がまだ完成していないので、その残りを終えるような意味合いでしょう。エペソ人への手紙では、教会が神の建物であり、キリストのからだでもあり、その身丈にまで成長することを話しています。「エペ 4:16 キリストによって、からだ全体は、あらゆる節々を支えとして組み合わせられ、つなぎ合わされ、それぞれの部分はその分に応じて働くことにより成長して、愛のうちに建てられることとなります。」みなさんが、自分自身は到達したと思ってしまい、それ以上、建て上げられる必要がないと考えてしまうと、そこで成長がとまります。止まった中途半端な状態で、ずっと建物が完成しないままであることが、実に多いです。パウロの言っているように、信仰の欠けたところを、主のみことばによって補ってもらいましょう。

### **3A 祈り 11-13**

そこで、パウロは具体的に、三つの祈りを献げます。

### **1B 開かれる道 11**

<sup>11</sup> どうか、私たちの父である神ご自身と、私たちの主イエスが、私たちの道を開いて、あなたがた

のところに行かせてくださいますように。

手紙だけではなく、顔を見せて、彼らに会って、それで指導ができるように祈っています。福音を教えることが、単にことばだけではなく、主に倣うことを彼らに見せて、彼らも主に倣いました。共に顔を合せることによって、それで初めて、教えられるものがあるのです。ネットだけでは足りないものが数多くあるのです。そこで道が開かれるように祈っています。

## 2B あふれる愛 12

<sup>12</sup> 私たちがあなたがたを愛しているように、あなたがたの互いに対する愛を、またすべての人に対する愛を、主が豊かにし、あふれさせてくださいますように。

二つ目の祈りは、愛についてです。彼らには、すでに愛がありました。愛による労苦がありました。しかし、それが豊かにされて、あふれてくるように祈っています。私たちは愛しているのであれば、それはすばらしいことです。しかし、今の状態で満足してはいけません。主は、聖霊の愛を私たちに注ぎたいと願われています。それで愛が豊かにされて、あふれるまでにしたいと願われているのです。教会において、これまでのものを現状維持していれば良いのだと考えたら過ちです。さらに愛が増えて、あふれるまでになる必要があります。

その愛の方向性ですが、第一に、「互いに対する愛」であります。イエス様が、わたしが愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさいと言われましたね。愛が一方的になってはいけません。だれかがひたすら愛して、他の人は受け取るだけではいけないのです。自分自身が愛する人として積極的に動く時に、互いに愛し合うことになります。第二に、「すべての人に対する愛」です。私たちが教会の中だけで愛し合うのではなく、こんどは、宣教者として愛を他の人々に流します。すべての人に対する愛です。この人はその愛を受けるに値しないと思われる人がいるならば、実は、その人こそキリストの愛を受けるべきですね。主が救われたのは、人々から嫌がられていた人、見捨てられていた人が多かったのです。

## 3B 聖潔 13

<sup>13</sup> そして、あなたがたの心を強めて、私たちの主イエスをご自分のすべての聖徒たちとともに来られるときに、私たちの父である神の御前で、聖であり、責められるところのない者としてくださいますように。アーメン。

これが三つ目の祈りですが、テサロニケ第一は、章の終わりに必ず、主イエスが再び来られることについて、パウロは話しています。1章の終わりは、神が御怒りを地上に下されるところから、私たちが救うために主が来られることについて話していました。2章の終わりは、主が来られる時に、私たちそれぞれが、冠を受ける、報いを受けることについて話していました。そして、ここ3章の終

わりは、主の前に、「聖であり、責められるところのない者としてくださいますように」という祈りです。

まず、その前に、「心を強めて」という祈りがあります。逆にいうと、私たちは心が弱くされている時に、聖ではなく汚れが入り、責められるところが多くなるということができるでしょう。主が来られるのに、しもべを打ち叩いていたような、しもべがいましたね？私たちの心はいつも、神の恵みによって強められ、しっかりと立っていることが必要です。

それで、主が来られる時に、「ご自分のすべての聖徒たちとともに来られる」とあります。これは、どういうことか？4章でじっくりと見ていきますが、主が来られる時に、主にあって死んだ人々がまずよみがえります。それから、生き残っている私たちが引き上げられます。死んだ人たちがよみがえって、それで主と共に来られる聖徒となります。そして私たちが次に、姿が変えられて、彼らに加わることとなります。そうした、聖なる者とされた人々に私たちが加わるのです。

ですから、聖であることはとても大事です。今日の教会では、幸せになるにはという哲学が入り込んできますね。けれども、聖なる者になるために私たちは召されています。「I ペテ 1:15-16 むしろ、あなたがたを召された聖なる方に倣い、あなたがた自身、生活のすべてにおいて聖なる者となりなさい。「あなたがたは聖なる者でなければならない。わたしが聖だからである」と書いてあるからです。」

そして、「責められるところのない者」と言っています。これは、主の前に献げるいけにえのことが背景にあります。主の前には、欠陥や傷があってはなりません。それと同じように、私たちが主の前で、そうした責められるようなことがないように努めるのです。主が来られることを思うのは、私たちが世の思い煩いから離れる力を与えます。主の栄光の姿にあずかり、キリストの御座の前に立つのですから、私たちは自分自身を清めることに努めます。主の似姿に変えられるのですから、汚れたまま、非難されるようなことが残っているままには、したくないのです。「Iヨハ 3:2-3 愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。」

みなさんの中で、心が弱まって、信仰が欠けているのに、成長することを中断してしまっていることはないですか？どうか、聖書からその整え、完成の働きに加わって行きましょう。そして主の来臨に備えるのです。